

腹腔鏡下前立腺全摘除術の保険診療開始について

当院では、2006年10月より、**腹腔鏡下前立腺全摘除術の保険診療が可能となり、開始しております。**前立腺癌の各治療方法と、腹腔鏡下前立腺全摘除術についてお知らせします。

前立腺癌の治療方法について

前立腺癌に対する治療法としては、1)ホルモン療法 2)放射線療法 3)手術療法 4)化学療法 5)待機療法(経過観察)などがあり、場合により、これらを組み合わせて治療を進めます。

ホルモン療法は、最も古くから行われており、睾丸を摘出するか、注射や飲み薬などで男性ホルモンを抑える治療法です。前立腺癌に対し、優れた治療効果を持ち、また、副作用もあまりないため、高齢者や全身状態の優れない方、転移のある方にも安心して使える治療法です。しかし、性機能不全となること、また、**長く使っていると効果が弱くなり(前立腺癌の再燃といいます)、一旦再燃すると残念ながら、有効な手段はありません。**

放射線療法は、通常行われる外照射(当院でも施行しております)といわれる方法では、手術療法に比べ、単独では根治性ではやや劣ると考えられており、**ホルモン療法との併用が一般的**です。合併症に関しては、放射線特有の直腸症状(下痢、肛門痛)頻尿などがみられますが、治療終了後徐々に改善されます。性機能に関しては、短期的には保持されますが、経過とともに不全傾向となり、また、ホルモン療法併用の場合は保持は望めません。

また、最近では小線源療法(有効な条件は限られますが)、重粒子療法(保険適応外)など、新しい装置も開発されております(これらは当院では施行できません)。

ただ、放射線療法では組織を取り出すわけではないので、癌の広がりを実際にはどの程度か分からないという欠点があります。

手術療法では、前立腺と精嚢といわれる部分を(場合により周囲のリンパ節とともに)取り除きます。従来から行われている**おへそ(臍)から下方の10~15cmを切開するのが‘恥骨後式前立腺全摘除術’**で、**‘腹腔鏡下前立腺全摘除術’は同じものを内視鏡(腹腔鏡)を用いて取り除きます。**

腹腔鏡下前立腺全摘除術について

腹腔鏡下前立腺全摘除術は、恥骨後式前立腺全摘除術（開腹手術）と、取り除く範囲は同様ですが、大きくお腹を切らず、下腹部に5～12mmの小さな穴を5つあけ、そこにカメラや細長い器械を通して手術を行います。そのうちひとつの穴を3cmほどに広げ、切り取った組織を取り出すのです。

腹腔鏡下前立腺全摘除術には、以下のような利点があります。

- (1) **術後の回復が早い**；傷が小さいため、術後の痛みが少なく、ほとんどの人が手術翌日に自力で歩くことができます。
- (2) **出血が少ない**；内視鏡により細部まで確認でき、操作が細かいこと、腹腔鏡下手術の特徴である気腹（おなかを二酸化炭素でふくらませて手術をすること）の影響などで、恥骨後式前立腺全摘除術での問題点であった術中出血量は、一般的に少ない傾向があります。
- (3) **尿道のカテーテルが早く抜ける**；膀胱と尿道をより緊密に縫合するため、5日間前後で抜く予定です。（恥骨後式前立腺全摘除術では14日前後）
- (4) **入院期間が短い**；これらのため、術後平均2週間で退院となります。（恥骨後式前立腺全摘除術では3～4週間前後）



（腹腔鏡下手術の様子）

ただし、欠点としては、

- (1) これまでの手術やホルモン療法などの影響で下腹部に強い癒着が考えられる場合
 - (2) 出血が多くなった場合
- など、従来の開腹手術が勧められる場合もあります。

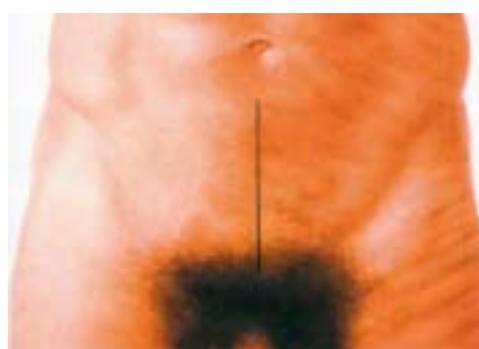
術後の合併症としては、尿失禁が見られますが、数日から数ヶ月かけ、軽快していきます(個人差があります)。性機能に関しては、癌の広がり方と合わせて、勃起神経を温存するかどうか、手術前に検討する必要がありますが、温存した場合も、機能低下は起こりえます(開腹手術と同等です)。

治療成績に関しては、細部まで確認できることから、開腹手術を上回ることも期待されますが、長期成績は出ていません。

もちろん、摘出した組織は改めて癌の広がり、性質を詳しく調べ(病理検査と
いいます)その後の経過観察、治療法を検討します(これは、手術療法の大きな利点の一つと思われます)。



腹腔鏡下手術の傷痕



開放手術の傷痕

腹腔鏡下前立腺全摘除術はこれまで、保険診療では認められておりませんでした。私たちはこれまで、神戸大学で2000年4月より、この術式に積極的に取り組んでおり115例を、また、保険診療改定に伴い2006年6月より、当院でも保険外で10例施行していましたが、10月より保険での施行が可能となりました。

治療方法は、患者さんそれぞれの病状、ご希望を合わせ、検討されるべきもので、一人ひとり違うものです。詳細は当院泌尿器科にお問い合わせください。